

あゆみ通信

VOL. 155

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

絶対他力の大道

清澤満之師(林暁宇先生訳)

第6章

まことの「修養の道」とはどんなことを言うのでしょうか。それは、自分を知ることであり、大道を明らかにすることです。

大道が明らかになれば、自分にあるものに不足を感じることがないでしょう。自分にあるものに不足がなければ人の物を欲しがることもないでしょう。人の物を欲しがらねば人と争うこともないでしょう。如来のお与えに満足して、他に求めることもなく人と争うこともなければ、この世においてこれほど大きな幸せはなく、これほど偉大な生活はありません。

こうしてはじめて私共は、この世において、ほんとうに独立自由の人となることができるのです。

このような人は何物にもおかされることなく、何物にも傷つけられることはありません。もしも自分の幸福が、他人や自分以外のものによって傷つけられ、おかされることが気になるならば、それはまったくありもせぬことに心をわずらわすものです。私共はそういう自分の迷いに目覚めることにこそ努力せねばなりません。(つづく)

聞に始まり 聞に極まる

浄土真宗の教えは「聞に始まり聞に極まる」と言われます。つまり、聞法することなのです。

でも、この2年間の間、さらに年を越えても、コロナウイルス感染拡大によって、大事な聞法の機会が奪われ、ややもするとだんだんその雰囲気は馴れてきて、いざ出かけると言うことにも億劫になって「まあ、ええか」いうことになってきている気がします。

「南無阿弥陀仏」は、仏の呼びかけです。そんな立ち止まり、腰かけてしまう私の心を、奮い立たせ、しっかりせよと呼びかけ、励まされています。(本)

真の宗

狐野 秀存

(大谷専修部部長・金沢教区仁随寺)



真宗七祖はみな本願念仏を私共に伝えてくださる大切なお方なのですが、「高僧和讃」などを見ると、親鸞聖人は善導

大師と源空上人(法然上人)のお二人に限って「真宗」という名を捧げています。この「真宗」とは、仏教を表す言葉です。存覚上人が著された『六要鈔』と言う書物に「真宗はすなわち仏教なり」と述べられています。真宗と言うのはいろいろな宗派があるなかの一つとされている方もいらっしゃると思います。しかし、それは歴史の流れの中で一つの宗教団体としての形をとってきたわけであって、真宗と言う言葉そのものは「仏教」と言うことなのです。

親鸞聖人は「教行信証」のなかで、この「真宗」という言葉に「マコト・ムネ」とわざわざふり仮名を振っています。真宗と言うのは宗派の名前ではありません。まして単にお寺の名前でもないのです。文字通り「真の宗」なのです。人が人としてこの世にいのちを受けて、苦勞多き人生を生きていく、その真の宗です。「このこと一つ」を依り処に、ここに我が人生ありと言えるような、そういう真の宗を明らかにする。それが真宗であって、お釈迦様の教え、ブッダの教え、仏教こそ人間にとっての真の宗だという訳です。

そして、そのお釈迦さまの教えの中でも、如来の本願の「えらばず、きらわず、みす

てず」の摂取不捨の心を明らかにする浄土の教えこそが真宗、仏教なのだということを言っているのです。

その「真宗」と言う言葉を、親鸞聖人は特に善導大師と法然上人に捧げておられます。その理由は、お釈迦さまの教えのここは偏為凡夫だからなのです。人生を生きる中で真の宗を求め、また真の宗がなければ一步も進めないのが凡夫と言う在り方をしている者です。凡夫にこそ真宗、仏教が届けられるべきなのだと言うことを明らかにしているのが善導大師と法然上人であるからなのです。ですから親鸞聖人は特に、善導大師と法然上人は真宗すなわち、仏教を明らかにされた方としてほめたたえているわけです。

(東本願寺発行「真宗の生活」2022より抜粋引用)

第37回第2組同朋大会

日時 3月12日(土) 午後2時
会場 御堂会館4階Aホール
内容 お勤めと法話
講題 願・身・心・人生・道
講師 酒井正夫師

(三重教区 道浄寺前住職)

参加費 1000円(記念品有)
申込 参加ご希望の方は、お手次のお寺へ申込ください。

大推協公開講座

日時 2月21日(月) 14:00~
会場 難波別院研修ホール
地下1階 講義室(大)
講題 「親鸞さんの見た風景」
講師 三好泰紹先生

(22組 蓮正寺住職)

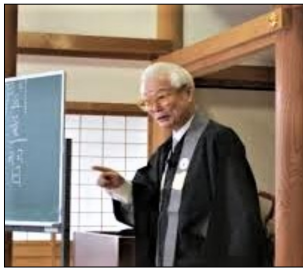
参加費 無料

(注) いずれの催しも、ご参加の皆さんは、マスクを着用ください。

また、コロナウイルス感染拡大状況によりまして、「緊急事態宣言」が出された場合は中止となります。

紙上法話**大無量寿経の仏道⑥**
延塚知道先生

という
ことは、
普通の考
え方だっ
たら人間
は、自分
が悪いと
思ってい



ない。だから苦しみが起こった時に、外側に原因があると思う訳。あいつがおるから苦しいんやとか、こいつがおるから邪魔になるんや、とか。

いつも外側に問題があると思うから、その外側を取ってしまえばいい。最悪の時は気に入らん奴は殺してしまえ、となるね。その理由もなんでやと言ったら、気分悪いとかね、わけのわからん理由で、人を殺すような時代になってきた。

だから普通の人から言うと、自分が悪いなんて思っていない。だから、外側に苦しみがあるから、その外側を取ってしまおうと言う考え方。それを外道と言う。

ところがさっき言ったようにお釈迦さまは、そんなもん外側を取ってしまっても苦しみを取ろうとしても無理や、と。気に入らん奴は、次から次から出てくる。何故か言うたら、自分が作つとるんやから。

比べる必要なし

それから外側の制約を取ってしまうのだって、例えば自分の顔が気に入らんようになったらどうする。実はこれ、僕のことです。本当に、嫌だった。頭悪いし、顔はよくないしね。なんでこんなん生きていかなあかなくて、自分で自分が気に入らなくなった。

そしたらこれ、殺してしまわなしょうがないのや。だけど僕は、死ねなんだ。つまり、嫌だと思つとる、自分の方がおかしいんやと言うことを、先生に教えられたんや。この顔のまんまでええ。

みんなもそうや。一人ずつ、誰とも比べる必要ないのや。痩せとろうが、太つとろうが、そのまんまで充分なんや。いいじいちゃんや、いいばあちゃんばかりや。そういうふう

に、こっちが苦を作つとる。
自分自身に目覚めていくことによって、苦を超えていこうとされたのがお釈迦さまです。お釈さま以外の人は、外側の苦を全部取ってしまえと言う。こんな顔が嫌だったら、整形手術せいでいい、せんでよかったわ。

嫌や言うとする自分がおかしいんだから、自分の方に目を向けて、そして何で苦しみが起こってくるかって言うことに目覚めて、そこから超えていく言うのが仏教です。それを、内観道と言う。

自分は見えない

仏教に出会うって言うことは、こっち側がずっと昔から我を立てて、反省する目を持たなんだ。地獄・餓鬼・畜生は、実は自分自身が作つとったのである。

親鸞聖人がそうおっしゃったんです。「いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」自分が作つとる世界なんだから、自分で引き受けていくしかない。地獄を作つとる元は、自分自身であるということに目覚める。目覚めたら、ちゃんと引き受けていけるようなものになるんや。

理屈やったら、ならんよ。勉強して分かったと言うてる人は、なりません。だけど仏教に本当に出会ったらそれを引き受けて生きていけることになる。そういうのが、仏教に出会うと言うことです。

阿難がお釈迦さまに出会ったと言うことは、そういうことが起こったんだと思う。今まで反省が届かないところに、きっと光が当たたんやと思う。そうでないと仏教に出会うと言うことにならん。今まで、反省しても反省しても、どれだけ反省しても、反省してい

あゆみの会第1回例会

日時 3月25日(金) 13:30

会場 稱念寺(天王寺区夕陽丘)

講師 岸野龍之先生(同住職)

参加費 無料

コロナ感染状況によりましては変更する場合があります。

るのが自分なんだから、自分の全体に目覚めるって言うことは絶対ない。

どんなに力の強い人でも、自分の体をもち上げられない。それは、誰かに教えてもらわなければ分らない。それはもう出会いとしか、言いようがない。だから、本当に出会うと言うことがなかったら、仏教にならない。自分でどれだけ反省したって、反省しとる自分が残つとる。

よくある話に、田舎のおばあちゃんが「先生、ほんとに私は愚かもんだつちゅうことが、よう分りました」。しかし、よう分った自分が残つとるんや。それでしばらくして又行ったら「ようわかつとる自分をいろいろ反省して、もうこれはほんとにおろかであるつちゅうことが、よう分りました」。まだ、残つとる。それは、ずっと残っていくわ。

誰かに会って、パチッと決まらなあかん。だから出会いと言うことが、仏教の一番大事なことになる『大経』は、その出会いから始まつとる。これは、ものすごく大事なことや。

智慧が輝く

それである日、お釈迦さまにこう言う。「お釈迦様、あなたのお顔は、光顔巍巍と輝いています」お釈迦様の顔が、光り輝いていた。今日の皆さんも、輝いてるね。

皆さんもインドへ行ったら分かるけれど、インドは余りきれいなところではありません。そこにお釈迦様が「大経」を説かれた。霊鷲山と言う山がある。その山に道があつて、一生懸命登っていく。汗びっしょりかいて、上まで行くけど埃っぽくて汚い所です。

(つづく)